



# 教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1990

発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 ☎(0797)31-3452

## ヨハネ・パウロ二世、ヨーロッパについて語る

### 英雄的な抵抗

非人間的な全体主義に対する信者の英雄的な抵抗のおかげで、キリスト信仰が『民衆の阿片』どころか、人々の自由の最高の保証であり励ましであることを世界中が再発見しました。

\*\*\*\*\*

しかし、正義への希望とその実現、および富裕と貧困との間には、まだまだ大きな壁が立ち回っています。

\*\*\*\*\*

(例をあげれば、)人間を単なるモノであるかのように、嘆かわしい実験の材料にしています。

(あるいは)生命に対する人間の権利や死の瞬間について恣意的に決定を下す各国の政治、家族と家庭生活を

徹底的に無視した経済組織など。

### 文化を容れさせる

西から東、北から南へと、動きつつある歴史は権力と恐怖の上に建てられた秩序を克服する動きを始めています。(…)人生や愛、社会生活、死の意味のように大きな問題に対する答え、現代の人々が要求する兄弟愛と連帯に支えられた世界の建設は、現在の科学や文化の手に負えないことが分かってきました。

(ところで)福音には、正義と愛、真理と連帯のパン種によって、私たちの時代の諸文化を変える力がそなわっています。

\*\*\*\*\*

全体主義体制が崩れた今、種の政治の深い刷新と、人々

自由への抑えきれない望み、変化の中に現れ、壁を打ち倒し、扉を開いてきました。(…)ご存じのように、出発点は多くの場合、教会だけに限るよう努力してきた人たちは、たもとを分かち道が徐々に開けてきました。(…)私たちの目の前に、ヨーロッパを形成した諸価値や象徴、すべての民をひとつにするキリスト教の伝統を土台とし、ひとつの精神に結ばれたヨーロッパが見えてきたのです。

\*\*\*\*\*

(自らの本質と尊厳を再発見したとは言え)それが完全に手に入ったわけではありません。五十年前に勃発した第二次世界大戦の傷跡を見れば、警戒していなければならぬことが分かります。国々

の霊的な(精神的な)望みに向かって力強く立ち帰るよう、要求されています。(教皇様はヨーロッパの再福音化について述べておられる。)

### 自由への抑えきれない望み

自由への抑えきれない望み、変化の中に現れ、壁を打ち倒し、扉を開いてきました。(…)ご存じのように、出発点は多くの場合、教会だけに限るよう努力してきた人たちは、たもとを分かち道が徐々に開けてきました。(…)私たちの目の前に、ヨーロッパを形成した諸価値や象徴、すべての民をひとつにするキリスト教の伝統を土台とし、ひとつの精神に結ばれたヨーロッパが見えてきたのです。

\*\*\*\*\*

超越的かつ永続的な価値を尊重しないかぎり、人間にふさわしい社会をつくることはできません。神をないがしろにするとき、人間はたちまち自らの限界に閉じこめられた奴隷となってしまう。しかし神の御前で自らを知り、神の救いの計画に協力しようと決心したとき、人間は本当に(人間である)ことができるのです。

超越的かつ永続的な価値を尊重しないかぎり、人間にふさわしい社会をつくることはできません。人間がすべてのものの絶対的な尺度となり、すべての源であり故郷(戻って行くところ)である御方(神)をないがしろにするならば、そのとき人間は、たちまちにして自らの限界に閉じ込められた奴隷となってしまう。それに反して、神の御前で(被造物としての)自らの分限を認め、救いの計画に協力する決心をしたとき始めて、ほんとうに人間であることができるのだと、キリスト者は経験によって知っています。

### ヨーロッパ・国家共同体

(ヘルシンキでの同意は)ヨーロッパ大陸の平和が軍事面での安全保障だけではなく、すべての人が自国に対してもつべき信頼ならびに国家間の信頼関係に特に依存するものであることを明確にしました。

イデオロギー面での中立、権利の源としての人間(ペルソナ)の尊厳、社会に対する人間の優位、民主的に認められた法律規定の遵守、社会組織の多様性——これらがかえがえない価値であって、これがなければ、だれでも近づくことができ、世界中に開かれた東西共通の家を建てることはできません。

\*\*\*\*\*

共通の家を建てる

(教皇様は東西ヨーロッパ、つまりスラブ諸国と西欧諸国

### ほんとうの主人公

人々は心に宿る尊厳と勇氣、自由の尽きることはない力を

をヨーロッパの二つの肺と表現されました。崩壊した壁を拾い集めて一緒に共通の家を建てる時が訪れたのです。残念ながら、西欧民主主義は多くの痛ましい犠牲を払って手に入れた自由をしばしば活用しませんでした。いわゆる先進国が、その発展を始めるにあたり、超越的な道徳(倫理)をわざと顧みなかったことは、明らかに事実です。寛大に助け合う努力や正義を促進するための真摯な努力、人間の権利を実際に尊重するための絶間ない努力と共に、利己主義や快樂主義、人種差別、物質中心主義など諸価値に反する傾向が広まり、現存していることも事実です。最近、自由と民主主義を獲得した人々が、この面での先輩とも言える人たちを見て失望することのないようにしなければなりません。

(そこで教皇様は次の点を強調されます)すべてのヨーロッパ人はヨーロッパを形成した精神的(霊的)な根・源を再発見するよう摂理の招きを受けています。

### イスラム教徒への呼び掛け

(信者の信教の自由を阻害するのは、無神論や世俗主義だけではありません。)大多数の国民がイスラム教徒である国で、キリスト者が置かれている心配な状況を無視するわけにはゆきません。人々の精神的な悲しみと苦しみのニュースが絶えず伝わってきます。しばしば礼拝の場所さえ持たず、周囲から疑いの目で見られ、信仰と一致した宗教教育も福祉事業も認められず、第二

級の国民であるかのような惨めな気持を抱いて生きなければならぬのです。

\*\*\*\*\*

(信教の自由を認めることができるためには、互によく知り合い、諸宗教間で協力しあうことが必要です。) 忠実な友情や困難における忍耐、神信仰を重要視する態度などイスラムの偉大な伝統は、教条主義的で狭量な態度を克服することのできる原則であると確信しています。

\*\*\*\*\*(相互性・相互依存の原理を考慮しなければなりません。)イスラム教徒は伝統的なキリスト教

# 人間の歴史における罪の普遍性

## 「罪」シリーズ ④

1 先のカテケージスの内容は、第二バティカン公会議の言葉に要約することができます。

「人間は神によって義の中におかれながら、悪霊に誘われて歴史の始めから自由を乱用し、神に対立し、自分の完成を神のほかに求めた。」「現代世界憲章」13) これこそ創世の書第三章でなされた人類の歴史における最初の罪の本質をつく分析です。

これは人祖の犯した罪でしたが、この罪とつながった罪深い状態は子孫に伝わり、原罪と呼ばれています。

国において自らの宗教の要請に応えるための手段を充分にもっているはずですが、キリスト教徒も伝統的にイスラム教を奉じる国で同じ扱いを受けるよう、強く望んでいます。

\*\*\*\*\*

世界中で霊の力が働き、人々が霊的な刷新をなすとげ、創造主なる神に近づくことができますように。

すべてを利潤や利益で判断し話しつつも、また力強く自由を祈願する今日、超越性、弱い人々への心づかい、人々の熱望を尊重する態度などのしるしが決して欠けることのあるまじくありません。

(九〇・一・十二、十三)

これはどういう意味でしょうか。原罪という語は聖書の中には一度も出てきません。けれども創世の書第三章の物語を背景にして、創世の書その後の章やその他の書の中にも、アダムの罪の結果として、人類全体に及ぶ普遍的な伝染病のように罪が世界中に「侵入した」様子が描かれています。

2 創世の書第四章には、すでにアダムとエバの二人の息子の間に起ったこと、つまりカインが弟アベルを殺した次第が描かれています。

創世の書はバベルの塔の建設(創世11・1-9参照)のことも述べています。これらの事は、どんなしるしも、またどんなに世界的な契約であ

## キリスト教的な強さの模範 マリア・ゴッティをまねよう

★ 特に青少年に、この若い聖人を模範にするよう勧めたいと思います。この十二歳の少女は、生命よりも、生命が有する様々な価値の方を選びました。

★ マリアのキリスト教的な純潔と純真無垢と慎みを、恐れずに称えてください。いずれも、常に必要だが、とくに今日その必要が強く感じられる徳です。それらは、人間として、キリスト者としての尊厳、

す。(創世4・3-15参照) そして第六章では犯された罪によって全世界が墮落したくんだりへと続きます。「人間の悪意が地上にはびこり、心の中にやどしたどんな考えも、いつも悪にはかり傾いているのをみられた主」(創世6・5)は、「世をながめられると、世は墮落していた。全ての人が地上で墮落した生活をしていたからである」(創世6・12) これに関連して創世の書はためらわずに述べています。「主は地上に人間を創ったことを後悔し、心のうちで嘆かれた」(創世6・6) 同様のことが、同じ書の中で罪によって全世界が墮落した結果であるノアの洪水の話(創世7・9)の中にみられます。

創世の書はバベルの塔の建設(創世11・1-9参照)のことも述べています。これらの事は、どんなしるしも、またどんなに世界的な契約であ

福音に則った本物の生き方、誠実な愛、相互の尊重、家庭の円満と幸せを守るために、どうしても欠くことのできない徳です。上に述べたような傷つきやすい生活の面で、せひこの若い聖人に倣ってください。物惜しみせず、スポーツ選手のように、彼女はよこしまな暴力を前にキリスト教的な強さに支えられて主のため敢然と抵抗し、すばらしい勝利を得たのです。

でも、根源が神になれば人間に一致をもたらすことはできない、ということを示しています。この点に關して歴史の歩みの中で注意すべきことは、罪がはつきりと神に「逆らう」ことを指向する行為であるばかりでなく、時にはまるで神が不在であるかのように「神を離れて気ままに」行動しようとする企てでもあるということなのです。それは神を無視するための、神無しに行うための、生意気にも神の代りに人間の力を賞揚するための口実なのです。この意味では、「バベルの塔」は現代の人々にとっても警告として役に立ちます。そういうわけで、私は使徒勸告「和解と悔悛」(13・15)「教皇様の声」八五年二月号に抄訳あり)の中でのこの事に言及したのであります。

3 人類の罪深さの証拠は、創世の書ですでに明らかにされて

# 説教・講話・書簡等の抄記

いすが、聖書の他の部分にも様々な方法で描かれています。どの場合をとって見ても、罪深さの普遍的な条件は人間が神に背を向けるといふ事実と関係があります。聖パウロは書簡の中で、この問題について特に雄弁に語っています。「彼らは深く神を知ろうとしなかったので、神は彼らのよこしまな心のままに不当なことを行うにまかせられた。彼らはすべての不正、罪悪、私通、貪欲、悪意、憎悪、殺害、争乱、狡猾、悪念に満ちる者であり、そしる者、悪口する者、神に憎まれる者、暴力を用いる者、高ぶる者、自慢する者、悪事に巧みな者、親に逆らう者、愚かな者、不誠実な者、情のない者、あわれみのない者である。(…)彼らは神の真理を偽りに変え、創造主の代りに被造物を拝みそれを尊んだ。神は代々に賛美されますように。アメン。神は彼らを恥ずべき欲に打ちまかせられた。すなわち女は自然の関係を自然にもった関係に変え、男もまた女との自然の関係を捨てて互いに情欲を燃やし、男は男と汚らわしいことを行ってその迷いに値する報いを身に受けた。(…)これらを行う者は死にあたるという神の定めを知りながら、彼らはそれを行うばかりでなくそれを行う人々に賛成する。(ローマ1・28〜31、25〜27、32)

## 生活を根本から改める

聖パウロが手紙を認め、使徒たちと共に働いていた教会の草創期に書かれたこの手紙は、当時の「罪深い状況」を描いた気品高かつ確かな記事

であるといえるでしょう。確かに、評価されるべき価値あるものも当時の世界には多くあったとはいえ、罪が様々な形で浸透し、世界は非常に汚染されていました。しかしキリスト教信仰は、勇気と剛毅とをもって大胆にこの状況に立ち向い、信者たちの生活の根本的な変更と回心という実りを首尾よく手に入れたのでした。この事は後に、キリスト教の影響下に形成され発展した文化文明を特徴づけるしるしとなりました。今日でも、ある国々では特に、人口の大部分がこの伝統を享受しています。

## 4

第二バチカン公会議の「現代世界憲章」に聖パウロの書簡とよく似た記述がみられるという事実は、私たちが生きてこの現代の徴候を示しています。「あらゆる種類の殺人・集団殺害・墮胎・安楽死・自殺などすべて生命そのものに反すること、傷害・肉体的および精神的拷問・心理的強制などすべて人間(ペルソナ)の十全性を侵すこと、人間以下の生活条件・不法監禁・流刑・どれい的使役・売春・人身売買などすべて人間の尊厳に反すること、また労働者を自由と責任のある人間(ペルソナ)としてではなく、単なる収益の道具として扱うような悪い労働条件など、これらのすべてと、これに類することはまことに破壊的なことである。それは文明を毒し、そのような危害を受ける者よりは、そのようなことを行う者を汚すものであって、創造主に対するひどい侮辱である。(27)

今はこの公会議のテキストが、教会の司牧者たち、カトリック・非カトリックの学者や教師たちによる他の沢山の告発の中で、今日の世界における「罪の状況」の記述をどの程度まで説明しているかを確認するため、歴史的な分析や統計をとっているべき時ではありません。量的なことはさておき、こうした数々の事実の存在が、あの人間の「伝染病」の悲しくも恐ろしい証拠となっているのは確かです。それは次のカテケージスでお話するつもりですが、聖書にも記されており、教会の教導職も教えていることなのです。

「人間は神によって義の中におかれたが、悪霊に誘われて歴史の始めから自由を乱用し神に對立し、自らの完成を神のほかに求めた。」

創世の書に記された最初の罪とは何であったのか、現代世界憲章の言葉が明らかに語っています。人祖の犯したこの罪によって、子孫である私たちにも罪深い状態が伝わり、原罪と呼ばれるものになりました。

## 5

さて、さしあたって二つのことがわかるでしょう。その第一は、神の啓示とその真正の説明者である教会の教導職が、絶えず一貫して人間の歴史における罪の現存と普遍性について語っていること。第二は、代々続いて繰り返されるこの罪深い状況が、個人生活・社会生活において顕著である倫理的な病という重大な現象を通して、歴史の「外側から」でさえあらわであるという

こと。人間の「心の内側」に目を向ければ、恐らくそれは一層よく認識でき、一層著しいことがわかるでしょう。

第二バチカン公会議の文書の他の箇所も、次のように述べています。「神の啓示によって知られるこれらのことは、人間の経験と一致する。すなわち、人間は自分の内心をふり返ってみれば、自分が悪に傾いており、多種多様な悪の中に沈んでいることを発見する。それらの悪が、人間をつくらした善なる神から来ることはできない。人間はしばしば神を自分の根源として認めることを拒否し、また自分の究極目的への当然の秩序ならびに自分自身と他人と全被造物とに対する調和を乱した。(13)

## 6

現代の教会の教導職のこうした声明の数々は、歴史的・精神的経験という事実を含んでいるばかりではありません。それらは、すでに分析した創世の書第三章、すなわち人類史上最初の罪を証言する章句を始めとして、聖書の中で幾度も繰り返される教えを忠実に反映したもののなです。

ここでは、激しく苦しむヨブの問いを思い出すだけにとどめましょう。「人は神のみに正しくありえようか? 人はつくり主のみに正しくありえようか? (ヨブ4・17)」「誰が不潔なものから清いものを出せようか? (同14・4)」「清いというその人間は何だろうか? 女から生れた者が、正しくあるだろうか? (同15・14) 他にも同じような問いが格言の書にあります。「私の良心はきよい、私は罪がないと言えようか?」

こと。人間の「心の内側」に目を向ければ、恐らくそれは一層よく認識でき、一層著しいことがわかるでしょう。

(格言20・9)

詩篇の中にも同じ叫びが響きます。「(おお神よ) あなたのしもべを裁かれるな、生きる者は誰も、み前に義とされぬ。詩篇143・2)」「罪人は胎にいる時から迷い、うそを語る者は、胎にいる時から道はずれた。(同57・4)」「私は不義の中に生れ、母は罪のうちに私をみこもった。(同50・7)」

こうしたテキストの全てが、旧約聖書におけるこのような感情思考の連続とした存在を指摘しており、少なくとも全世界に広がった罪の状況についての難しい問題を提出しているのです。

## 7 罪の根源は人の心

聖書は人間の内側、良心・心の中に罪の根を捜すよう、私たちをせきたてています。このことは、人間は罪のうちに身ごもったと言いつつ、神よ、わたしに清い心を作れ(詩篇50・12)と神に叫ぶ詩篇に表されていると言えるでしょう。人間の本性の中で「先天的」ともいえるような罪の普遍性とその遺伝性の双方が、聖書の中でしばしば述べられています。詩篇13では「みな迷い、みな腐りはてていた、よい事をする人はいない、一人もない(詩篇13(4)・3)と述べているのです。

「心のかたくなさ」について

のイェズスの話は、この聖書の背景(マテオ19・8参照)から理解できるのです。聖パウロは、このかたくなさを主として倫理的な弱さとして、むしろ善を行う能力に欠け

こと。人間の「心の内側」に目を向ければ、恐らくそれは一層よく認識でき、一層著しいことがわかるでしょう。

# 不変の教え

ている状態として考え、次のように述べています。「私は肉体の人であって罪の下に売られた者である。私は自分のしていることが分からない。私は自分の望むことをせず、むしろ自分の憎むことをするからである。」(ローマ7・14-15)「善を望む」とは私の内にあるが、それを行うことは私の内にはない。(同7・18)「善をしたいとき悪が私のそばにいる。」(同7・21) 興味深いことにこうした言葉は、しばしば異教の詩人の言葉とよく似た響きをもっています。「私は善いものを見て、よいと認めるのだが、私がするのは一番悪いことなのだ。」(Quid Metamorph 7・20参照) どちらの場合も、(また非常に多くの霊的著作や文学全般においても)、人間の経験する悲しい現実がよく現れています。これらの事柄についてほのかな光を投げかけてくれるのは、原罪の啓示だけなのです。

特に第二バテイカン公会議が示した現代の教会の教えは、この啓示された真理を正確に反映して、「この世界は：創造主の愛によって造られ保たれており、罪のどれい状態に陥った。」(『現代世界憲章』2)と語ります。そしてまた、「やみの権力に対する苦しい戦いは、人間の歴史全体に行きわたっている。それは世の初めから始まったものであって、主が言われるように、最後の日まで続く。人間はこの戦いに巻き込まれているので、善に着くためには常に戦わなければならず、神の恩恵の助けと大きな努力なしには自己の統一を確立することもできない。」(同37)と述べているのです。

## 過越と私たち



「主は私たちの罪のためにわたされ、私たちが義とするためによみがえられた。」(ローマ4・25)「すべての人のためにキリストが死なれたのは、生きる人々が、もう自分のためではなく自分のために死ぬためである。」(コリント②5・15) パウロのこの言葉は、巡礼の旅路を歩む私たちに慰めと励みを与えてくれます。

「ご存じのとおり「過越」は「通過」の意味で、様々に解釈される言葉です。始めに思い起すことは、メシアの到来のために神に選ばれたユダヤ人が自由を求め、モーゼに導かれてエジプトの奴隷状態から脱出した勇気ある歴史的な「通過」です。次に、脱出前にユダヤ人たちが行い、後に「過越の祭」として毎年記念されるようになった羊の血のいけにえのこと。さらに、犠牲を通して人類を罪の抑圧から解放し、旧約から新約への「移行」を実現されたイエズス御自身・メシア・真の小羊を示しています。最後にもう一つ、「過越」は死から新たな命へのイエズスの移行を意味する言葉です。しかし一般に、「過越」または「イースター」は、十字架の御死去の三日後に約束どおり起ったキリストの光栄に満ちた復活を示す言葉として解釈されています。

「過越の意味」を知るとは、何よりもまず、キリストがまことの神の子・人となられた(みことば)・絶対の真理・世の光であることを確信することです。

聖土曜日に行われる徹夜祭は、火と光と洗礼の水を用い、聖歌(ヘズルテスト)(よろこべ)を歌って、キリストが世の光であることを象徴的に表す素晴らしい儀式です。教会のポーチ(玄関)に灯された聖火から、蘇られたキリストを象徴する復活のろうそくに火が灯されます。そのろうそくには、時の始まりと終りが神の永遠の内に刻まれることを表す「アルファ」と「オメガ」の二つの(ギリシャ語の)言葉とその年の年号が記されています。助祭が「キリストの光」を歌い、復活のろうそくから一人ひとりが手にするろうそくに火が灯され、行列が祭壇に近づき、教会内に明かりがつけられます。臍い主キリストが、神の啓示の光を伝え、闇を照らし、歴史の謎を解く唯一の御方であることを強調するすばらしい光景です。

そこでキリスト信者は、蘇られた

キリストの御前で勇氣と熱情と熱意を新たにし、世界中に真理を宣言します。「悔い改めて、福音を信じよ。」

「過越の意味」は、イエズスの十字架上の受難と死による贖いをもたらす救いの効力を完全に理解することです。聖週間の典礼を通して、ゲッセマニの園でのイエズスの苦悩から十字架に釘づけにされたときの悲痛な叫びにいたる一連の苦しみを思い起し、「過越の意味」を心に刻みましよう。十字架上のイエズスの死は御父への崇敬を表す最高の行為でした。人類の名において神に捧げられた真の犠牲でした。あらゆる礼拝と祈りの形態を含む最高の祈りだったので。

苦悩に満ちた悲痛な十字架上の死は罪の償いのための犠牲でもありません。それによって私たちは、神に對する反逆であり、愛の拒絶である罪の重大さを知ります。また、私たちが恩寵の状態に回復させ、神の三位一体の命に与らせ、永遠の幸福を受け継ぐことができるようにしてくださったことを理解するのです。

イエズスの十字架上の受難と死は私たちに人生の真の意義を示しています。受難と死を通して贖いが永遠において実現したのです。キリストの教えと使命を受け入れるならば、キリストが蘇られたように、私たちも栄光のうちに蘇ることができるようです。聖金曜日には聖パウロと共に十字架上のキリストの御前にひざまずいて祈りましよう。「私は……キリストとともに十字架につけられた。私は生きていますが、もう私ではなく、キリストが私のうちに生きたまうの

である。私は肉体をもって生きていますが、私を愛し、私のためにご自身をわたされた神の子への信仰の中に生きています。」(ガラツィア2・20)

「過越の意味」は聖木曜日の主の晩餐のミサの中でみごとに表されています。聖体の犠牲・秘跡の制定を思い出させるミサです。イエズスは無限の愛にあふれる英知をもって、二度と繰返されることのないただ一度の礼拝と償いの最高の行為であるカルワリオの犠牲が、イエズスによって任命された司祭や司教を通して歴史の中に残り続けるようにしてくださいました。

聖木曜日は、キリスト信者の生活は聖体中心であるべきことを思い起させます。敬虔で筋の通ったキリスト信者ならミサと聖体拝領なしではいられないでしょう。主の過越なしには何もできないことを知っているからです。「過越の意味」を理解し、聖体の制定の前に弟子の足をお洗いになった主なる神を思うと、人々に愛を示す必要と義務、理解、忍耐、赦し、苦しむ人々への気遣いなどを実行する必要があるはずなのです。

聖週間が、復活祭の中心となる教えを考える良い機会となりますように。教区の「聖なる三日間」に参加しましょう。そうすれば典礼が与える恩寵は必ず実るでしょう。告解と聖体の秘跡に近づきましょう。そうすればこの復活祭が真に霊的な祭となり、一年を通して、また永遠の命に向ってずっと続くことでしょう。

祈りと祝福をこめて皆さん一人ひとりに心からお勧めします。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費  
 ■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要  
 郵便振替 3-72393